# 何よりも、「機械いじり」が好き。

花野俊正
常務取締役 / 製造部門全体の責任者

日本綿布には150台のシャトル織機があります。生産管理を担う花野さんは、織機ごとの稼働状況・進捗状況をチェックし、納期遅れの防止や不良品が発生しないよう、日々点検に勤しんでいます。これまでには織布準備作業・織布作業、ロープ染色業務にも携わってきたベテラン職人。2019年には産地で高い技能を有する職人「繊維マイスター」に認定されました。

「機械いじり」が好きで、日本綿布を訪ねたときに、古い機械があるのを見て「面白そう」と思い、自分の好きなことが生かせると感じて入社したそうです。

「日本綿布の主力織機であるシャトル織機はメンテナンスが大変です。糸や生地は同じものができて当たり前と思われますが、綿は生き物。季節や温度、湿度などによって織り上りが変わるため、織機の微妙な調整が不可欠です。前と同じようにしたからといって、同じようなでき上がりになるとは限りません。」その難しい調整は、まさに職人が持つ「技能」。「イメージから作ることも多いですが、勘というのは人それぞれ。お客様のイメージをいかに具現化するか、経験を生かして、粘り強く調整しています。」

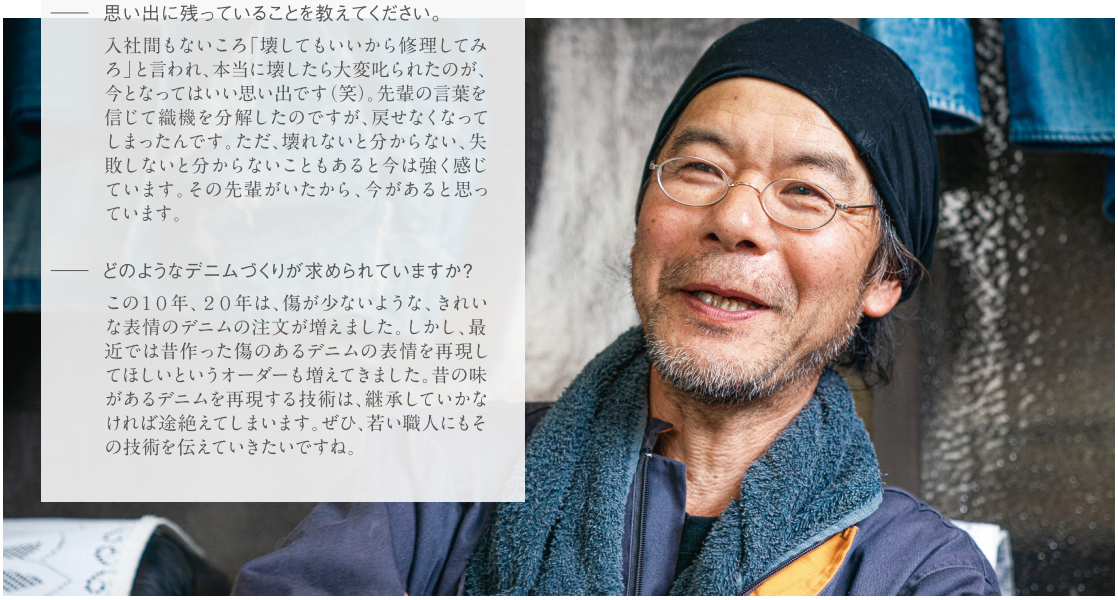
## もっと生の声 Q&A

—— やりがいを感じるときはどんな時ですか?

壊れた織機を直せた時です。単に部品を変えるのは「直す」ことではありません。前より良い状態にするのが、直すということだと思います。ひとつの部品を変えると他の部品にも影響しますので、辛抱強い調整も必要ですが、満足いく状態に仕上がった時は本当に嬉しいですね。

—— 思い出に残っていることを教えてください。

入社間もないころ「壊してもいいから修理してみろ」と言われ、本当に壊したら大変叱られたのが、今となってはいい思い出です(笑)。先輩の言葉を信じて織機を分解したのですが、戻せなくなってしまったんです。ただ、壊れないと分からない、失敗しないと分からないこともあると今は強く感じています。その先輩がいたから、今があると思っています。

—— どのようなデニムづくりが求められていますか?

この10年、20年は、傷が少ないような、きれいな表情のデニムの注文が増えました。しかし、最近では昔作った傷のあるデニムの表情を再現してほしいというオーダーも増えてきました。昔の味があるデニムを再現する技術は、継承していかなければ途絶えてしまいます。ぜひ、若い職人にもその技術を伝えていきたいですね。